

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第139号 2026年7月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 新入職員による職場紹介 —法政大学大原社会問題研究所—	田中 智子	2
東京教育大学新聞会の「教室の素顔 分岐点に立つ学問」特集 —『教育大学新聞』第525号(昭和45年2月10日)後半—	谷本 宗生	6
女子教育史散策・昭和戦時下編(88) 共立女子学園の場合4	長本 裕子	10
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(27): 『一目瞭然東京遊学学校案内』(大正11年)(3)	吉野 剛弘	17
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(11) 嘉納塾における嘉納治五郎(その6)	富岡 勝	21
神辺先生を訪ねて(4)	長本 裕子	24
刊行要項(2026年2月15日現在)		26
短評・文献紹介 千原ジュニア『句集 手花火』を読んで(谷本宗 生)、『京大マガジン 0号「失敗」』について(富岡勝)		27
会員消息 谷本宗生、山本剛、富岡勝		28

コラム

新入職員による職場紹介 —法政大学大原社会問題研究所—

たなか さとこ
田中 智子(法政大学)

法政大学大原社会問題研究所——ここが本年4月からの筆者の職場である。「名前は聞いたことがある」「『大原社会問題研究所雑誌』なら読んだことがある」という人は多いだろう。しかし、実

際どこにあって、どういう研究所なのかよく知らないという人も多いのではないだろうか——つい半年ほど前まで、筆者もそんな一人であった。着任してようやく4か月、まだまだ知らないことも多いが、読者の皆さんに当研究所のことを広く知ってもらうため、この場を借りて職場紹介をしていきたいと思う。

1. 「大原」とは？

まず多くの人が不思議に思うのが、名前の「大原」だろう。「大原」とは、研究所の創立者である大原孫三郎のことである。大原孫三郎(1880-1943年)とは、倉敷紡績株式会社(クラボウ)の第二代社長である。紡績会社の社長がなぜ研究所を創立したかという、彼が傾倒していた石井十次の影響がある。石井十次は孤児救済事業で有名であるが、大原はそんな石井の影響を受け、石井亡き後は救済事業を引き継ぎ、1916年に財団法人石井記念愛染園を設立し、さらに1919年には、社会問題の根本的解決を目指し、大阪に大原社会問題研究所を設立したのであった。大原についてもっと知りたいという方は、クラボウHPの「大原孫三郎人物伝(<https://www.kurabo.co.jp/sogyo/>)」を見てほしい。

2. 大阪から東京、そして法政大学へ

以上のように、大原社会問題研究所は民間の研究所として大阪で発足したのであるが、それがどうして法政大学の附置研究所となったのか——大きく分けて、二度の転機がある。一度目の転機は、大原からの独立および東京移転である。創立以来、研究所の資金の多くは大原からの出資によって賄われていたが、

1928年の三・一五事件以降、社会科学研究に対する圧力が強まったこと、および世界的な不況によって倉敷紡績の業績が傾いたことから、大原は研究所への出資停止を通告した。その後、初代所長・高野岩三郎らとの折衝を経て、1936年に研究所の自立経営および東京移転が決定した。こうして東京・柏木（現在の新宿区）で独立した研究所として再出発するのであるが、1945年空襲によって全焼してしまう。その後、高野の自宅などを転々とした後、1949年に法政大学と合併することになる——これが二度目の転機である。法政大学と合併することになった契機としては、後に所長となる久留間鮫造（経済学部教授）や、後に総長となる大内兵衛など、研究所の中に法政大学関係者がいたことがあげられる。

3. 現在は多摩丘陵の上に

法政大学と合併した頃の研究所は、現在も大学の本部がある市ヶ谷にあったのであるが、経済学部・社会学部の多摩校地への移転が決まると、両学部と縁の深い研究所とともに多摩に移転することとなり、1986年より現在に至るまで町田市相原の多摩キャンパスにある。町田市といっても、最寄り駅は町田駅ではなく、①中央線・西八王子駅、②京王線・めじろ台駅、③横浜線・相原駅から延々とバスに乗って行くことになる。筆者は③のルートで通勤しているが、定刻では13分のところ、帰りは道路の混雑で20分以上かかることもある。徒歩や自転車で通勤・通学する猛者もたまにいるようだが、相原駅から多摩キャンパスまでは4.5kmあり、最後は山登りになるのでよほどの体力自慢でなければお勧めはしない。①②のルートも似たような感じである。このように決して便利とは言えない地にあるのだが、東京ドーム約10個分という広大なキャンパスのおかげで、書庫スペースも広く取ることができている。

4. 研究所の役割・機能

では、現在の大原社会問題研究所は、どのような役割・機能を有しているのだろうか——大きく分けて4つの役割・機能を有している。1つ目はなんとといっても

研究機能である。研究所では社会問題に関する様々な研究会・共同研究プロジェクトを開催している。現在行われている研究会・共同研究プロジェクトについては、研究所 HP「研究会・共同研究プロジェクト (<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/research/project/>)」を参照していただきたいが、研究会については、他機関所属の研究者や市民の方も参加できるものも多いので、興味のある方はぜひ参加していただきたい。

2つ目は出版事業である。研究所では1920年から年1回『日本労働年鑑』を刊行し、1953年から月1回『大原社会問題研究所雑誌』を刊行している。このほか、研究叢書、ワーキングペーパー、単行書、日本社会運動史料などを多数刊行している。詳細については、研究所 HP「出版物 (<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/research/publication/>)」を参照していただきたい。また、『大原社会問題研究所雑誌』のバックナンバーや目次は、「大原社会問題研究所雑誌 (<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/oz/>)」のページから閲覧可能となっている。

3つ目はライブラリーとしての機能である。研究所には書籍が和洋合わせて約19万冊あり、逐次刊行物も和洋合わせて約1000種類を所蔵している。これに加えて、社会問題、労働運動、環境問題などの資料を収集し、それらを整理・保存するアーカイブズとしての機能も有している(4つ目の機能)。これらの書籍・逐次刊行物および資料は、一部を除いて申請のうえ閲覧することが可能である。「全書誌情報検索機能 (<https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/search2/>)」のページから資料検索ができるので、何か気になる資料がないか、一度検索してみてほしい。ちなみに、「教育」というキーワードで検索してみたところ、19573件ヒットした。

5. 研究所の人員構成

最後に、研究所にどのようなスタッフが勤務しているのか紹介していきたい。研究所のスタッフは大きく分けて①教員系、②職員系、③外部の研究員に分類で

きる。2026年7月現在、①には、専任研究員4名（所長を含む）、兼任研究員8名、研究補助員（RA）1名がおり、②には、専任職員2名、専門嘱託（アーキビスト）1名、研究業務補助員3名、臨時職員7名がいる。以上が研究所に実際に勤務している人員だが、合計すると26名である。それぞれ勤務体系や勤務日も異なるので、誰が何曜日に来ているか把握するだけでも一苦勞である。ちなみに筆者は、専門嘱託（アーキビスト）として勤務しているが、一般的なアーキビストの業務（資料の収集・整理・保存、閲覧対応など）は現在のところほぼしておらず、研究所見学ツアーや展示など、アウトリーチ活動にあたる業務をもっぱら担当している。このほか、③外部の研究員として、名誉研究員6名、客員研究員4名、兼担研究員8名がいる。上記のスタッフについて具体的に知りたい方は、「2026年度法政大学大原社会問題研究所スタッフ（https://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/about/staff/year_list/?staff_year=2026）」のページを見てほしい。

以上、簡単ではあるが、現在の職場である法政大学大原社会問題研究所についての紹介である。多摩丘陵の上という不便な場所ではあるが、他にはない貴重な資料を多数所蔵しているので、ぜひ一度足を運んでいただきたい。

また当研究所では、個人・団体を問わず、研究所見学ツアーを随時受け付けている。研究所の代表アドレス（oharains@adm.hosei.ac.jp）に希望日時等をメールでいただければ、もれなく筆者が所内（書庫を含む）を案内することになるだろう。こちらをご検討いただければ幸いである。

***コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

東京教育大学新聞会の「教室の素顔 分岐点に立つ学問」特集

—『教育大学新聞』第525号(昭和45年2月10日)後半—

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

このニューズレター137～138号で、『教育大学新聞』525号(1970年2月)に掲載された特集記事「教室の素顔 分岐点に立つ学問」における、東京教育大学の文学部・教育学部・理学部・農学部について抜粋紹介した。これに続いて、本稿のNL139号では、体育学部と光学研究所を紹介したい。

体育学部:スポーツから「人間学」へ 体育学部の研究水準はそのまま日本の水準である。学部があるのは国立で唯一、私立でも二つしかない。最近は選手養成、教員養成でなく研究にピッチをあげている。なにぶん体育学は生まれてから日の浅い学問であるため、武道科のように政治的利用に乗ぜられることもあるが、科学的な体系へと突き進んでいる。

体育学:体育とは文化 体育学とは、身体的な活動を中心にすえて、その中で身体的・精神的な面から人間の発達をみていこうとする学問であるといえる。芸術学が芸術という文化を対象とする同じ意味で体育文化の研究ともいえよう。体育学科は、体育学、体育史、体育社会学、体育心理学、体育管理学、陸上競技、球技、舞踊、野外活動、体操の十講座に分かれて自然科学・社会科学的な見地からも研究にとりくんでいる。また、体育学では現代の体育のあるべき原理とその方向を示しその原理の学問的体系の確立をめざしている。体育史では体育をいろいろな角度から歴史的に研究する。古典的体育書の解説や批判、近代スポーツの成立についてなどである。体育社会学では体育、スポーツ、レクリエーションなどの問題を社会学的な角度からとらえて研究する。体育心理学では単なる教育心理学ではなく体育そのものにおける心理学的な問題の解明を行って

いる。体育管理学では体育の場の条件を整備するという体育管理の課題に向って、体育の管理原則や管理手順を体系化しようとしている。陸上競技ではスポーツのトレーニング法や基礎体力の養成の問題をとり扱っている。球技ではボールゲームの技術や学習場面における感覚知覚的な機能について研究している。舞踊では舞踊の心理や社会的特質など、野外運動では自然研究、集団生活などの教育内容を含んだ野外活動を体育的見地からみている。

健康教育学：内部的变化を追求 耳馴れない学問であるが、健康教育学とは、健康について精神的・身体的・社会的に幅広く研究していく学問である。戦後体育専門学校と高師の合併により生まれて新しいが、内容的には歴史がありまだまだ未開の分野も多く将来性をもっている。体育学科が体育スポーツを通して対社会的にかかわるのに対して、健康教育学科では内部的变化をより微細に深く追究しその予防医学的、体力健康増進という面に特殊性を示す。医学博士の教授の多いのもそのためである。現在、解剖学、生医学、スポーツ医学、衛生学、健康管理学の五講座がある。身体内部の諸機能の変化を研究する解剖学、筋肉・骨格などについて究める生医学、医学的な面から身体を追究するスポーツ医学、個人環境衛生について広く研究する衛生学、学校工場の衛生管理、健康教育についての健康管理学。三年から専門教育にはいり、教室の雰囲気はグッと学問的になるスポーツサークルにはいり厳しい訓練を続ける学生もおり文化サークル研究会で充実した生活を送る者も多い夏の水泳実習冬のスキー実習に全員参加するはずという。

武道学：武道の近代的体系を [略]

付属光学研究所：光学研究所は本学唯一の付置研究所で新宿区百人町におかれている。付置研究所とは学部と対等の資格をもちつつも学生を募集せずもっぱら研究活動のみを行い教育活動をしていない部局であり学部に付置されている研究施設よりも予算的にも優遇されている。文理大物理学科がもっていた光学分光学の特色をさらに充実させるための独立研究所構想が、昭和二十

四年の教育大学発足にともない二部門のもとに設置されたものでその後の拡充で七部門になっている。いずれにしても光学に関する研究所としては全国唯一のもので発行している学術誌サイエンス・オブ・ライトはそのまま日本の光学研究の水準を示し、世界でもトップレベルにある。赤外線部門では半導体と赤外線の関係、赤外線フィルター、遠赤外線分光器の研究、分光学部門ではイオン結晶の光物性・電子状態の研究、紫外線部門では分子スペクトル、分子間衝突、極紫外線の研究、光学器械部門ではコンピューター利用のレンズ自動設計、薄膜の研究、光学応用部門では量子エレクトロニクス、コロイドの研究、光学測定部門では回折格子、結晶の光学的性質についての研究、理論光学部門では固体の光学的性質の研究、が行われている。朝永振一郎名誉教授も昨年の退官まで光研の所長をつとめノーベル賞の対象となった超多時間論、くりこみ理論を完成させた。また光学応用部門の研究成果の一つは模造真珠を世に誕生させることになり、年間六十億円の外貨のもとになっている。

付属農場演習林： 付属農場は世田谷区祖師谷、保谷市、埼玉県坂戸町にあり、横木清太郎教授の他六人の助手が研究にあたっている。祖師谷農場は約九・六ヘクタールで主として栽培・飼育の生産技術に関する実習実験に用いる。保谷農場は約二ヘクタールで近郊農業の研究をする。坂戸農場は約十五ヘクタールで飼料作物の研究が柱である。演習林は長野県ハケ岳と川上、静岡県井川にあり、海上道雄助教授の他四人の助手が研究にあたっている。広さはハケ岳九十ヘクタール、川上百ヘクタール、井川千七百ヘクタールと莫大なものである。

高原生物実験所： 長野県小県郡真田町の菅平高原標高一、三五〇メートルにある。昭和九年に発足し、三〇ヘクタールの敷地に研究室、標本室、樹木園がある。研究棟も昨年立派なものが新築された。寒地的生物研究を中心に、動物発生学、昆虫生態学、小地域気候研究が行われ、他大学及び学術及び学術団体による施設利用、学生の分類生態学の実習、実験等も行われている。所長

は植物の印東弘玄教授が併任、安藤裕助教授、金森正臣助手、林一六助手がいる。

臨海実験所：伊豆下田町にあり、主に海の生物を対象にした変態・生殖を含む実験発生学研究、心臓生理・消化酵素に関する生理生化学研究、海産昆虫の生態学研究、下等動物の分類学研究、海藻類の生理・生態学的研究等が行われている。採集船「あかね」をもち、プランクトンの採集などの実習にも使われる。動物学科の学生は二年以上になると、ここで一週間の臨海実習を行う。また本学だけでなく、他大学の学生の実習や、医・理・農の各分野の研究者による利用もされている。また水族館も設置され近海の魚類、海産動物を多数飼育している他、近海の高産物の標本をおさめ一般公開している。江原有信、原田五十吉教授と、橋本碩、横浜康継の両助手がいる。

その他施設：これらの他に教育学部付属リハビリテーション教育研究施設、盲学校、ろう学校、大塚養護学校、桐ヶ丘養護学校、農学部別科、工研究所と付属学校がある。

図書館に関しては、「蔵書数では国立大付属図書館中で一流だが、昭和八年に建てられた建物は戦災にあったものを復旧したもので設備も老朽化している」と、現状について言及されている。

この後、東京教育大学の文学部・教育学部・理学部・農学部・体育学部と光学研究所等は、筑波への移転のロジックのなかで、どのように学問研究上の変化変貌を遂げていくのであろうか。

女子教育史散策・昭和戦時下編(88)

共立女子学園の場合4

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

『ニューズレター』第138号で、共立女子職業学校の大正期について述べた。引き続き、昭和初期の様子を『共立女子学園百年史』『共立女子学園百三十年史』などを参考に述べよう。

共立女子専門学校誕生

大正14(1925)年に開設された共立女子職業学校専門部は、「専門学校令」による専門学校ではあったが、外形上職業学校の一部のような印象を否めなかった。世間に専門学校として認識されるためには独立させる必要があった。そのため、昭和3(1928)年、今川小路の校地に新校舎と門及びコンクリート塀の建設、旧校舎増築等の工事を夏期休暇中に完成させ、設備を整えた。同年6月15日付で東京府を經由して「名称並学則中変更の件」を文部省に申請し、同年10月1日付で認可を得た。そして共立女子専門学校と改称し、専門学部の生徒を該当学年に編入させてスタートした。専門学校長には専門学部長の鳩山春子がそのまま就任した。これで共立女子職業学校(以下、職業学校と表示)と共立女子専門学校(以下、専門学校と表示)の二本立てとなった。

申請時の学則では、第一章第一条に「本校は女子に適切なる専門の学術技芸を授け、婦徳の涵養に努め、入りては良妻賢母となり、出ては中等学校教員たらんとする者を養成するを以て目的とす」と設置目的を掲げた。本科(3カ年)、家庭科(2カ年)、専攻科(1カ年)を設置した。生徒定員は本科750名、家庭科1,200名、専攻科250名であった。

入学資格は、本科は①高等女学校を卒業した者、②専門学校入学者検定規程により専門学校入学に関し指定を受けた者、③専門学校入学者検定規程により検定試験に合格した者、④小学校本科正教員、尋常小学校本科正教員・小学校専科正教員もしくは小学校准教員の免許状を有する者となっている。家庭

科は①高等女学校を卒業した者、②③は本科に同じ。専攻科甲部は共立女子職業学校受験科甲部（第Ⅰ種生）を卒業し成績佳良なる者。専攻科乙部は①本校家庭科を卒業し成績佳良なる者、②共立女子職業学校家庭科又は受験科乙部（第Ⅰ種生）を卒業し成績佳良なる者となっている。

また、第七章二十六条に研究科についての規定があり、「本校卒業生にして本校の許可を受け、一科目又は二科目の技芸に付精深なる程度に於て更に研究せんとする者の為に研究科を置く」と設置目的を記し、研究科生は授業料を納める必要はなく、学費の一部もしくは全部を給与又は貸与することがあるとしている。研究科は定員外であった。

学科課程及び毎週教授時数について、本科は次のようであった。

第1～3年：修身1、教育2、国語（2）、家事4、図画3、裁縫（1年14、2・3年13、手芸（1年12〈編物4・刺繍4・造花4〉、2・3年13〈編物・刺繍・造花から1科目を選修する〉） 合計36

※国語は随意科目とし、その教授時数は技芸科目の時数を割いて充てる。各学年とも当校の伝統である裁縫と手芸に26時間、約72%が配当されている。

なお、家庭科は1・2年ともに裁縫に24時間配当し、随時科目として、手芸（編物・刺繍・造花）に各4時間を配当している。専攻科甲部は裁縫と手芸（編物・刺繍・造花）に34時間を配当し、1科目もしくは2科目を選修する。専攻科乙部は裁縫に34時間配当している。⁽¹⁾どちらも術科の実習が大部分を占める。

文部省は、昭和3年12月21日、本科に対しては裁縫と手芸、専攻科甲部に対しては裁縫と手芸、乙部に対しては裁縫の中等教員無試験検定を認可したが、その適用は昭和4年3月以降の卒業生に限ると指定した。⁽²⁾

共立女子職業学校本科の内容変更

職業学校は、尋常小学校卒業を入学資格とする修業年限4年の課程のみであったが、従来の課程を本科第一部と称し、別に高等小学校卒業を入学資格とする修業年限2年の本科第二部を設けることとした。昭和7（1932）年12月20

日、文部大臣の認可を受け、翌8年4月1日から発足させた。また、同時に当校の本科卒業または高等女学校卒業を入学資格とし、修業年限1年の専攻科を置くことになった。生徒の定員は、本科第一部800名、本科第二部100名、専攻科50名、合計950名となった。

学科課程及び毎週教授時数について、本科第一部は次のようであった。

修身1(1~4年)、公民科1(3・4年のみ)、国語(1・2年6、3・4年4)、外国語2(1年のみ)、歴史・地理(1・2年1、3・4年2)、数学(1・2年2、3・4年1)、理科1(1~4年)、図画(1・3・4年2、2年1)、家事(3・4年4)、裁縫(1年8、2~4年9)、手芸(1年8、2~4年9)、体操2(1~4年) 合計1・2年33、3・4年35

※外国語は2~4年は随意科目とし、その教授時数は技芸科目の時数を割いて充てる。各学年とも裁縫・手芸に16~18時間と多くの時数を配当している。

なお、本科第二部は1、2年ともに合計35時間のうち、裁縫・手芸に22時間、専攻科は24時間配当している。⁽³⁾

財団法人名を「財団法人共立女子学園」と変更

大正8(1919)年11月以来「財団法人共立女子職業学校」が正式名称となっていたが、昭和10(1935)年9月、財団法人の名称を「財団法人共立女子学園」と変更し、事務所を東京市神田区一ツ橋二丁目九番地八に設置した。

昭和10年ごろの東京では、女子の向学心が上昇していたものの、公立高等女学校は収容力が少なく、著しく入学難となっていた。明治33(1900)年の高等女学校生徒数と比較すると、昭和11(1936)年は、生徒数が約36倍に増加していた。⁽⁴⁾そこで優良な私立高等女学校を設置することが社会の要望に応える道であると考え、新校舎落成の暁には高等女学校を設立する方針を決定した。そして昭和3年に独立した共立女子専門学校とともに、三つの学校を総合するにふさわしい名称に変更したのである。

近代式大校舎・共立講堂落成

昭和11年3月、東京商科大学の跡地に、前校長宮川保全の悲願でもあった耐震耐火の鉄筋コンクリート造4階建、屋上2階の校舎が完成した。地下も合わせると、述べ約4,069坪、室数は合計113室、大講義室が1階と4階にあり、暖房装置、室内電話設置、エレベーターが地下室より屋上に達する最新式の設備であった。予定より1年3カ月遅れたが、長さ約150m、幅18mの白亜の殿堂が完成した。建築費用は、積立金、借入金、寄付金などでまかなった。特に職員・生徒・卒業生には、「校舎建築設計説明」という小冊子を配布して寄付金等の協力を求めた。同窓会は鳩山春子が考案した「祝賀ピン」⁽⁵⁾を5個1組5円で販売し、その売り上げを寄付した。

さらに第2期工事として同年8月大講堂の建設に着手した。耐震耐火の鉄骨鉄筋コンクリート建、地下1階、4階建の延べ約1,183坪の大講堂で、建築資金42万4,100円はほぼ借入金でまかなうことにした。1階の1,050席は机付きで授業に使用できるようになっており、総計3,000人以上の収容が可能であった。昭和13(1938)3月に落成し、「共立講堂」と命名された。ステージ前にはオーケストラボックスも設置されており、当時の東京において日比谷公会堂と並ぶ大規模施設であった。教育学術文化面において価値あると認めた外部一般の使用にも貸し出せるようにしたため、有名になった。日本文化の発展に寄与する役割も果たしたのである。

共立高等女学校設立

共立高等女学校は、昭和10(1935)年度から開校の予定であったが、新校舎の完成が遅れたため、翌11年4月、「高等女学校令」による共立高等女学校(以下、高女と表示)を設立した。女子に必要な高等普通教育を施すことを目的とし、特に誠実勤勉の徳を磨き婦徳の涵養に目標を置いた。修業年限5年、生徒定員1,000名とした。昭和11年1月13日付で設置認可を申請し、同年2月19

日付で文部大臣の認可を得た。付帯条件の一つとして、900坪の屋外運動場と、屋内運動場の併設を求められた。そこで校舎の地階に屋内運動場を設け、屋外運動場は校舎裏側の商科大学跡地の約1,305坪を借用することにした。

入学資格は尋常小学校卒業者、もしくは12歳以上でそれと同等の学力を有する者である。教育課程及び毎週教授時数は、次のようであった。

修身(1~3年2、4・5年1)、公民科1(4・5年)、国語(1~3年6、4・5年5)、英語(1~3・5年3、4年5)、歴史地理(1・2年3、3~5年2)、数学(1・2年2、3~5年3)、理科(1・2年2、3~5年3)、図画1(1~4年)、家事(4年2、5年4)、裁縫4(1~5年)、手芸1(1年編方、2年刺繍、3年造花、4・5年で編物・刺繍・造花の内1科目を選修する)、音楽(1・2年2、3・4年1)、体操3(1~5年) 合計1~3年29、4・5年30

裁縫には一定時数を確保しつつ、国語、英語、数学、理科にも相当時数を配当している。また、職業学校では設けていない音楽を設けている。(6)

これにより、「高等女学校令」による共立高等女学校と、「実業学校令」による共立女子職業学校と、中等学校が2校設置されることになった。尋常小学校卒業後4カ年で裁縫手芸その他女子に必要な事柄を学びたい者は職業学校本科第一部に入学すればよく、5カ年の高等普通教育を受けたい者は高女に入学すればよく、いずれを卒業しても上級の専門学校へ入学することができる制度になった。学則による生徒の定員は、専門学校1,930名、職業学校950名、高女1,000名、合計3,880名の、三校を総合する女子教育の大規模学園となった。

鳩山春子の死去

奇しくも共立講堂が落成した昭和13年3月20日の朝、鳩山春子は発病した。動脈硬化であった。同月22日の卒業式並びに創立記念式典には長男の鳩山一郎(当時衆議院議員)が代行を務めた。春子は、その後休養に努め4月7日の高女及び職業学校の入学式、8日の始業式、9日の専門学校入学式には出席した。ところが4月、5月、6月と発病し、同年7月12日に死去した。77歳であった。

春子は、大正11(1922)年12月、校長就任以来関東大震災からの復興、専門学校開校、新校舎・共立講堂の建設、高女設立など、学園の発展のために大奮闘した。特に新校舎や共立講堂の建設に関して、用地の払下げや銀行からの借入金について粘り強く交渉したという。また、日本初の女子対象の通信制の高等教育を行う「大日本女学会」を創設するなど社会事業にも、『婦人の修養』『模範家庭』など多くの著作を通して広く女子教育界にも貢献した。

同年7月15日に共立講堂で校葬が行われた。文部大臣はじめ関係諸団体、一般会葬者5,360名、教職員生徒3,300余など、1万人近い会葬者が春子の死を悼んだ。⁽⁷⁾

学園は同月27日、臨時商議委員会を開き、商議員の補欠選挙、理事・監事の選出を経て、春子の長男一郎の妻鳩山薫が昭和13年8月5日付で校長に就任した。当時49歳であった。薫は、春子からの継承の様子を同窓会誌『桜之友』(第46号、昭和15年1月1日発行)に載せている。

誠実勤勉、純潔貞操は(母の)最も好きな言葉であつた。虚言策略を蛇蝎の如く忌み、是を撃退するに寸毫も仮借しなかつた為に、時に人の誤解を招き、感情を害した事もあつたが、信ずる所に向つては実に勇敢に邁進する處は大抵の男子も及ばぬ熱があつた。彼の「国民精神作興ニ関スル詔書」を拝読するのが好きで、教育勅語は最後の病床にあつても口ずさんで居られた。私は此学園の机には並ばなかつたけれども、同じ人の翼の下に三十余年を育てられ、しかも運命のいたづらは私をして去つた人の後の椅子に座らせた。後略(『共立女子学園百年史』443頁より)

このように記し、昭和12年9月から学園に来て校務について見習っていたと綴っている。内々に、春子は薫を後継者にと考えていたのであろうか。薫の祖母は春子の姉であり、実母が薫14歳の時に亡くなったからであらうか、17歳の時に鳩山家の養女となった。そして明治41(1908)年、薫20歳の時に一郎と結婚した。⁽⁸⁾薫は、以後昭和57(1982)年8月、93歳で死去するまで、戦前から戦後にかけて44年間、校長、学園長、園長、理事長として学園運営にあたることになる。

注

- (1) 『共立女子学園百三十年史』119～121 頁より
- (2) 『共立女子学園百年史』365 頁より
- (3) 『共立女子学園百年史』378～382 頁より
- (4) 『共立女子学園百年史』395・396 頁より
- (5) 鳩山春子の倫理観を表した「五つの徳」すなわち貞操・義務・誠実・勤勉・家庭の各文字が書かれたもの。(『共立女子学園百年史』335・389 頁より)
- (6) 『共立女子学園百年史』400～402 頁より、『共立女子学園百三十年史』132 頁より
- (7) 『共立女子学園百年史』419・420 頁より
- (8) 「鳩山会館・鳩山薫」参考
<https://www.hatoyamakaikan.com/family/kaoru/>

参考文献

- 『共立女子学園百年史』
『共立女子学園百三十年史』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(27):

『一目瞭然東京遊学学校案内』(大正11年)(3)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(慶應義塾大学非常勤講師)

今号は、前号に引き続き大明堂書店より刊行された『一目瞭然東京遊学学校案内』を見ていく。今号では、「一六、高等予備校と予備校」に掲載されたものを見ていくことにする。

早稲田高等予備校(東京市牛込区馬場下町二十四番地 電車若松町下車)

目的 高等の諸学校に入学志望者のために予備教育を施す。

修業年限 一ヶ年。

学科 国語、漢文、英語、歴史、地理、数学、物理、化学、博物、図画。

入学期 各学期の始(四月、九月、一月)とす、但し欠員あるときは臨時に許可することあるべし。

日本高等予備校(東京市神田区三崎町三丁目 電車三崎町下車)

目的 前者に同じ。

修業年限 一箇年。

学科 前者に同じ。

入学期 四月、九月。

入学資格 中学校四年級修了者及之と同等以上の学力を有する者但し右の資格なき者も聴講生たることを得。

高等予備校(東京市神田区今川小路専修大学内 電車九段下下車)

目的 同前。

修業年限 一ヶ年。

授業 昼間夜間の二部教授とす。

学科 同前。

入学期 四月一日より五月一日までとす、但し補欠として臨時入学を許すことあるべし。

入学資格 年齢十七歳以上の男子にして左の資格ある者に限る

(一) 中学四年修業者、(二) 甲種商業学校卒業者、(三) 師範卒業者、(四) 専検合格者、(五) 同指定者、(六) 履歴により本校に於て中学校卒業者と同等の学力ありと認めたる者。

大正高等予備校(東京市神田区錦町三丁目二番地 電車錦町下車)

目的 高等の諸学校に入学せんとする者のために予備教育を授く。

学科其他 学科は国語、漢文、英語、幾何、代数とし、修業期間は約三ヶ月、授業は午後とす、入学資格は中学四年修了程度、授業料は月額金四円。

開成予備学校(東京市神田区淡路町二ノ四 電車須田町下車)

目的 本校には左の分科を置く。

(一) 中学科(夜学) 中学の学科を速成せんとする者又は中学校の各年級に入学せんとする者の為に中学校の学科程度に拠りて普通学を教授す。

(二) 高等受験科(午後) 高等学校、高等商業学校、高等工業学校、其他の官立諸学校に入学せんとする者の為に中学校補習科程度に由りて普通学を教授す。

修業年限 中学科は五年、高等受験科は一ケ年。

学科 (中学科) 修身、国語、漢文、習字、英語、数学、物理、化学、歴史、地理、博物、図画、体操、(高等受験科) 国語、漢文、英語、数学、物理、化学、歴史。

入学期 学年は四月始まる、入学期は毎学期の始四月、九月、一月なれど欠員あるとき臨時入学せしむることあるべし。

入学資格 中学科一年級は尋常小学卒業の程度、二年級以上は前学級の課程につき試験を行ひたる上許可す。

錦城予備学校(東京市神田区錦町三丁目 電車錦町下車)

目的 本校には左の二科を置く。

(一)普通科(夜間) 昼間中学校に通学する事能はざる者及び中学校の各学年級に入学すべき準備を為さんとする者のために普通学を教授するを以て目的とす。

本校には初学者の為に特に英語及数学を最初より教授するの便法を設く。

二、高等科 高等学校に入学する者のために予備学科を教授す。

修業年限 普通科四年、高等科一年、授業は毎日午後六時より九時又は十時迄。

学科 前者に同じ。

入学資格 普通科は尋常小学卒業の程度、高等科は中学校、甲種商業学校、農学校卒業程度。

詳細な情報が掲載されている学校は、『最新東京学校案内』と変わりはない。当然のごとく、これといって新たな情報はない。「高等予備校と予備校」と題打っていることと、その学校の並びから、大正高等予備校までが高等予備校で、開成予備学校以降が予備校という扱いなのだろうと思われる。

一方、この進学案内書では、詳細を記載しないまでも校名のみが記載されているものがある。大正高等予備校の後ろには、明治高等予備校、中央高等予備校、東京高等予備校の名前が掲げられ、それぞれ明治大学、中央大学、法政大学の項を参照するよう書かれている。ただし、それらの大学のどこ

ろを見ても、これらの予備校に関する記述はない。

錦城予備学校の後ろには、正則予備学校の名前のみが掲げられ、括弧書きとして「外国語及漢数の学校の項参照」と書かれている。こちらは前号で紹介した通りそこに記載があるのだが、「予備学校」という名称でありながら「外国語及漢数の学校」に掲載されていることの方が不自然と評すべきところである。

次号では、1924(大正13)年版、1925(大正14)年版における情報の変容について触れていく。

『嘉納治五郎』(1964年)を読む(11)

嘉納塾における嘉納治五郎(その6)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

前号では嘉納塾のなかでつくられていた手書き回覧雑誌『気帥』について紹介した。

本号では、嘉納塾で身体的訓練が重視されていたことと、嘉納治五郎の教育観における身体的訓練・鍛錬の位置づけについて見ていきたい。

日課、柔道、徒歩

本連載の第129号(2025年9月15日付け)で、嘉納塾の日課表を寺院の日課を比較して、嘉納塾の日課が早朝起床、警醒当番など、寺院の日課と似通った鍛錬的な色彩の強いものであったことを述べた。

また、嘉納は「塾と講道館は一体のものとし、柔道は塾生の鍛錬上必須のもの」と考えたため、好むと好まざるとにかかわらず塾生全員に柔道の稽古が義務づけられていた(『嘉納治五郎』講道館、1946年、136頁)。

さらに、塾生には徒歩通学だけでなく、日曜日の帰宅や塾行事の遠足でも東京市内は遠近にかかわらず乗り物の利用が許可されなかった。時には夜間の行軍や雪の中での行軍も行われた(『嘉納治五郎』、137頁)。

嘉納塾での身体的鍛錬に関する嘉納の見解

このように嘉納塾では、身体的鍛錬が重視されたが、それは何故なのだろうか。少し後の時期になるが、『嘉納塾同窓会雑誌』第35号(1916年9月)に掲載された嘉納の講話(1916年1月15日)が、『嘉納治五郎大系』第5巻(小谷澄之ほか編、本の友社発行、1987年)に収録されている。少し長くなるが、この講話の一部を以下に引用する。

(略) ゆえに真に貴ぶべきは爵位官等や名声などという外から着けられた印に依るのではなく、その人の真の価値あることすなわち内に備れる実力にあるのである。いかに立派な着物を着ても、またいかに立派な家に住んでも、その人の精神が下劣で、行状に不都合は点があるならば、その人は立派な人ということは出来ない。家屋や衣服はいかに粗末であってもその人自身に真の価値があれば人は真に貴い人ということが出来る。(略)

しからは、真の価値ある人とはいかなる人であるかというに、真の価値ある人とはまず第一に身体が健全ではなくてはならない。いかに世のために尽くさんと思っても、身体がそれに堪え得ない場合には思うように働くことが出来ない。また身体を健全にすると同時に智識を磨き徳性を養わなければならない。しかるに今日の学校教育では重に智識を増すことにのみ力を用いて真に健全なる身体を作り徳性を涵養することが不十分であるから高等の教育を受けた人で身体の健全な者がはなはだ少ない。ことに道德の点に至っては少しも価値のない人が多いのである。

身体の健全な人にならんとすることは、たいしておつかしい事ではない。まず三度の食事がいつもうまく食べられるということが肝要である。しかしうまくからといって食べ過ぎないようにその度合いを計って腹一杯に食べない時は次の食事がまたうまく食べられる。そういう状態を続けていかなければならぬ。第二は運動である。今日普通の中学校などでする運動ははなはだ不十分であるから、あれだけではというてい足りるものではない。だから我が塾では様々なる服務と柔道とをやって初めてその不足を満すのである。そのゆえに服務や柔道は精々よくやらなければならない。また柔道の練習をする際に咽喉が渇いたからとて湯茶を多量に呑むことは厳禁すべきである。第三に注意すべきことは睡眠の事である。睡眠時間は平常は規則正しくすることが必要であるが、時には二、三時間しか寝られないこともあるから、平常から慣らしておくことが必要である。平常規則正しく睡眠して精力が満ち

満ちしておって月に一度くらいは徹夜しても翌日は少しも疲労を感じることがないようになくてはならない。塾の警醒当番はこれを毎晩しては身体に害を及すことがあるが、たまたま自分の起きようとする時に起きるということは修養上大切なことである。かくのごとくにして身体を鍛錬すれば身体強健なる人となることが出来る。（『嘉納治五郎大系』第5巻（小谷澄之ほか編、本の友社発行、1987年、83頁～85頁）

つまり嘉納は、真に価値のある人は、第一に身体が健全な人であると述べる（なお、現代的な観点からは、「健全な精神は健全な身体に宿る」という言説は、真の共生社会の理念とはやや矛盾するようにも筆者は思ってしまう）。

ただし、嘉納のいう「健全な身体」というのは、極端に激しい運動や厳格すぎる訓練ではなく、指導者とともに規則正しい生活と柔道の稽古（毎日の柔道稽古で嘉納は、厳しすぎる鍛錬をおこなった訳ではないと推測される）を続けることで自然と養われていくような身体であると解釈できる。

次号では、嘉納塾閉塾（1919年11月）の2ヶ月後の1920年1月16日に治五郎が閉塾について述べた「嘉納塾関係諸氏に告ぐ」を紹介して、嘉納塾における治五郎の教育方針についての検討のまとめとしていきたい。

神辺先生を訪ねて(4)

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

8月8日、神辺先生に面会してきました。少し頬が痩せられたように感じましたが、声には張りがあって、お元気でした。

『ニューズレター』第138号と、先生が明星大学人文学部教授と大学院教授を兼ねておられたころの論文でしょうか、「『学徒勤労動員の行政措置』——中等学校を中心に——」(明星大学学術機関リポジトリ)をインターネットで見つけましたので、印刷して持参しました。私は目下昭和の戦時中の女学校の様子を書いていますので、先生の論文に出会えたことがうれしくて、お見せしたところ、「ああ、こういうのを書いた覚えがあるなあ」などとおっしゃり、明星大学時代のことを語ってくださいました。先生は学長選挙に推薦されたことがあり、残念ながら選挙には敗れましたが、大学にも派閥があって翻弄されたようでした。

また、先生も私も勤めた東京文化学園(現新渡戸文化学園)は来年創立100周年を迎えます。『武士道』の著者として知られる新渡戸稲造が、前身校の女子経済専門学校と付属高等女学校の初代校長を務めた学園です。100周年を期し、ドキュメンタリー映画『灯る学校』を制作するという記事が載った新渡戸基金維持会発行の季刊新聞『太平洋の橋』(第89号)を持参しました。先生は東京文化短期大学でも学長にと周囲から望まれながら、創立者のご子孫に遠慮され、他校へ転任された経緯がありました。

そんなあれこれいざこざもあったことなど、懐かしそうに語ってくださいました。先生は調子に乗ったときに机をてのひらでバンとたたいて、「そうだ! そうなんだよ!」などとやや興奮気味におっしゃるのですが、その“机たたき”も何度か出て、高らかに笑いながら昔をしのばれていました。

ロビーに、入所されている方々の手作り作品が飾られていました。赤い色紙で作った金魚が水槽に見立てた小皿の上で泳いでいる作品が並んでいました。そ

の中に「神辺靖光」という名前を見つけました。女性が圧倒的に多い施設ですが、皆さんに交じってこうした作品作りに参加して、穏やかな日々を送っていらっしゃいます。しかし、時には教育史のこと、大学のことなどをもっともっと語り合いたいご様子でした。

施設で風邪がはやっているとかで、面会は 20 分ほどで切り上げて帰りましたが、「またきてください。さよなら」と大きな声で手を振って見送っていただきました。夏の日差しが痛いほど照り付ける午後でしたが、先生のさわやかなお声がいつまでも心に響いたことでした。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2026年2月15日改訂)

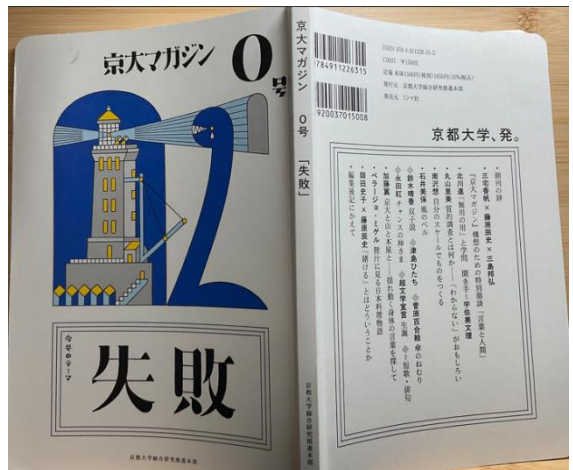
1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (著作権の許諾確認) 記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。
8. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
9. (レイアウト等) 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
10. (web公開) ニュースレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
11. (研究交流会) ニュースレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
12. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

芸人千原ジュニアさんが記した『句集 手花火』2026 年を手にして、読んでみました。この句集は、ある人気 TV 番組で、芸人の千原ジュニアさんが 2017 年から出演して、俳人夏井いつき先生らの厳しい判定を経て、永世名人へ昇格するまでに詠んだ句の数々が収められています。この句集の素晴らしい点は、初めから素晴らしい句ばかりを網羅して掲載しているのではなくて、当初は凡作であった句も夏井先生の添削指導をうけて、適切な修正をはかり俳句の学びを深めていけば、みるみる上達していく動向がよく分かります。たとえば、千原ジュニアさんが残念ながら現状維持の判定をうけた句「すり傷を蛇口の流す夏の空」を、「助詞は正確に」という夏井先生による解説によって、「すり傷の砂を蛇口に流す夏」と添削されています。夏井先生いわく、「悩ましいのは、助詞の『の』でしょう。正確には『蛇口』というのは『場所』で、蛇口からの水で『すり傷を』流しているはずです。『の』を『に』に変えましょう。…また、もう一押し工夫があってもいいのではないかと思います。…例えば、『砂』としてみましょう。『すり傷の砂を』とすると、『流す』の動詞もより生きてきます」と。才能ある原石も、やはりというか適切な助言・指導があって磨かれてこそ真に輝いていくのかもしれないですね。教育者としても、その姿勢に学ぶべきでしょう。(谷本)

『京大マガジン 0号「失敗」』
(京都大学総合研究推進本部編、ミシマ社発行、2026年3月20日発行)を発売直後に入手し、パラパラとめくったが、先日、じっくりと読み直した。目次は次の通りで、書評家の三宅氏、ノーベル賞を受賞した北川氏のような著名人の発言だけでなく、大学院生や学部生の作品もあり、編集長をつとめた藤原辰史氏(京都大学人文科学研究所)の興味の広さがうかがわれる。



・創刊の辞 ・三宅香帆×藤原辰史×三島邦弘『京大マガジン』構想のための特別鼎談
「言葉と人間」 ・北川進「無用の用」と学問 聞き手=宇佐美文理 ・丸山里美 質的調査
とは何か——「わからない」がおもしろい ・南沢想 自分のスケールでものをつくる ・石井

美保 風のベル ◇ 鈴木晴香 双子説 ◇ 津島ひたち ◇ 菅原百合絵 傘のねむり ◇ 永田紅 チャンスの神さま ◇ 超文学宣言 生誕 ◇=短歌・俳句 ・加藤翼 京大と山と本屋と——揺れ動く身体の手紙を探して ・ペラージョ・ミゲル 狸汁に見る日本料理物語 ・師田史子×藤原辰史 「賭ける」とはどういうことか ・編集後記にかえて

この雑誌のねらいは、藤原編集長「創刊の辞」の次のような記述から推し量ることができる。

「学ぶことに取り憑かれた者たちの、紙の上での実験室でありたい」

「数学や物理学を志す院生は哲学の講義に通い、史学者は物理学や生物学の専門書をひもとく。異種が出会い、話し、首をかしげ、驚き、考えがわく。稲妻のようなアイデアにごくまれにだけけれども、からだ全体がしびれることがある。そのようなしびれの共有感覚がなければ、京都大学の存在理由などないにひとしい」

「枯れた学問の井戸は、二度と元に戻らず、未来にも託せない。そうした世の中の流れに抗して、教員も職員も学生も、大学の外の人びとと一緒に、太古からの預かり物を確認しあい、知識と知恵を披瀝しあつて、もっとお互いのことを知り合える場所を作っておきたい。こんな異種交流の実験室は、将来大学がなんらかの巨大な力によって被災したとき、いや、もしかすると災いは始まっているかもしれないが、学問の自由を避難させ発酵を続けておける麴室こうじむろとなるだろう」

「師田史子×藤原辰史 「賭ける」とはどういうことか」など、知らない分野の記事が特に面白かった。

第0号のテーマは「失敗」と名付けられているが、売れ行きは好調で、ミシマ社のWebサイトでは売り切れとなっている。京都大学生協書籍部などの一部の書店に残っている分だけのようだ。2冊もっているの、ご希望の方はご一報を。(福岡)

会員消息

このところ、日本の生態系の変化がよく報道されていて驚いています。たとえば、日本の在来植物などの生態系を損なうとされる、外来生物のカミキリ虫の駆除には一般懸賞金を出している自治体が出始めています。さらに、外来種のアメリカザリガニは雑食性で、各地の植物や生物の生態系に著しい影響を及ぼし、農作物や土砂などにも被害を出し多くの関係者らを悩ませているとも聞きます。アメリカザリガニは異常な繁殖力を有し、少しばかりの一過性の駆除では残念ながら減ることはなく、放置すれば日本古来の生態系は絶滅し、特定の農作物被害だけでなく、地域での土砂災害・水害なども引き起こし、地域防災のうえでもけって看過できない問題となっています。もはや一部の関係者らだけ

の自助努力では、許容できない事態と感じます。行政だけでコソコソ取り組む方向でなく、自然の生態系の変化については、我われ一般市民らも関心をもって、地域の教育的な課題として問題共有し、みなで前向きに検討していく段階になったかと実感しますね。(谷本)

先日、東洋大学の井上円了哲学センター主催第2回大学史講演会に参加しました。講師は湯川次義先生です。『東洋大学百年史』は、本当に面白く読んでおりました。湯川先生のご説明で、大学沿革史編纂の意義や課題がとてもよくわかりました。創立150周年を記念する新たな『東洋大学史』への期待として、今後の沿革史に必要な事項も示されて、とても興味深かったです。(山本剛)

誌上をお借りして、次のようなお知らせをいたします。このように、相変わらずやや忙しく、楽しく過ごしています。もしもご関心と関係しそうなテーマがありましたらご一読ください。

1. 旧制高等学校記念館(松本市)夏期教育セミナー(8月29日～30日)

資料研究委員として25年程前からお手伝いを続けている旧制高等学校記念館(松本市)夏期教育セミナーが今年も第29回として、8月29日(土)から30日の2日間開催されます。

今年のテーマは、「校歌からみえる日本社会―校歌がうたわれてきた歴史を通して」で、講演と研究発表を含めた2日間の日程で開催します。

1日目の夕方には懇親会(自由参加。要事前申し込み)もあります。詳細は、以下の記念館Webサイトでご確認いただけます。

旧制高等学校記念館イベント案内

<https://matsu-haku.com/koutougakkou/event>

(これは、本ニューズレターでたびたびお知らせしている話題ですが、急に8月末にスケジュールが空いた方は、ぜひ松本でお会いしましょう)

2. 京都シティフィル合唱団演奏会(10月4日)

研究以外のことで恐縮です。幸いにも大学生のころから団員(テノール)として通い続けられている京都シティフィル合唱団の演奏会に、今年も出演します。

今年は京都コンサートホールで10月4日(日)、午後2時 開演、曲目はC.オルフの「カルミナ・ブラーナ」と J.ラター「グローリア」で開催されます。京都コンサートホールは2028年から2030年、改修のために長期閉館の予定ですので、この機会に京都コンサートホール、いかがでしょうか。

もしもご都合よろしければ、ご来場いただけたら大変嬉しいです。ご一報いただければ、少し安くチケットをご用意いたします。

詳細は、以下の合唱団のサイトでご確認いただけます。

<https://cityphil.com/>

3.「吉田寮の建築文化財登録をめざす市民の会」の署名

京都大学吉田寮の現棟（1913年竣工）を建築文化財として保存・活用することを目指す市民団体「吉田寮の建築文化財登録をめざす市民の会」が発足しました。私も学生寮の歴史を研究していることと、学部生時代に住んでいて寮生や職員さんに変にお世話になったことから、呼びかけ人の一人に加わりました。

市民の会の詳細や関連情報は、会のWebサイトでご覧いただけます。

<https://konoe.localinfo.jp/>

この市民の会で、京都大学への請願書に関するオンライン署名を開始しました（9月初め頃に集約して京大へ提出する予定です）

もしご興味がありましたら、以下の署名フォームからご検討ください。市民署名なので、どなたでも署名していただけます。メッセージを書いていただくこともできます（書いた方のご了承の上、会のWebサイトで公表する予定です）。一人でも多くの方にご協力いただけたら大変心強いです。

<https://forms.gle/YE7qCWKNdWRqmhvu8>

（富岡）

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。